

---

## 国際情報通信網 INTERNET の利用と情報収集

外国語学部 保崎 則雄

世界中のどこでどのような新しい研究（成果）が発表されているのか、他国の状況はどうなのか、自分の行っている研究課題は其中でどのような位置づけがなされるのかといったことに、私は研究者の一人として常に興味、関心がある。たとえば国内の動向は学会、研究会に出席すれば、それなりに情報が得られる。ところが、海外の情報については、そう頻繁に学会に出席も出来ず、また出席できたとしても多くの発表を聞く時間もないのが現実であり、プロシーディングも常に手にはいるとは限らない。このようにややもすると情報

の収集、発信に手間取り、折角新しい研究課題に着手してもなかなか貢献できないという事態が生じ易い。国際共同研究も手紙のやりとりでは参加しづらい。これはまさにシャーロックホームズの世界の通信手段を現代人がどのように受けとめるかに似ている。

コンピュータを利用した情報通信ネットワーク、INTERNETはこの点、利用の仕方によっては非常に便利であり、利用者数は世界で2000万人とも3000万人とも言われる。実は私も昨年4月よりこ

のネットワークに参加し、電子メール（E-mail）を中心に情報収集、交換を行い、授業でも部分的に活用している。敷設、加入の手続きについては情報処理センターに譲るとして以下、利用者として気がついた点を述べる。

まず研究室から簡単にアクセスできるのがよい。端末としてのコンピュータはたとえすぐ隣の部屋にあったとしても、日常的な利用からはかなり疎遠になる。利用時における空間的距離は心理的距離に級数的に比例すると思ってまちがいない。手の届くところにあるメディアを通じて地球の反対側に手紙を送ることが出来るという利点は、何物にも替え難い。

今のところ利用料金が個人負担にならず、既に敷設してある設備を主に使用するということが大学負担になっているのが現実である。今後の利用頻度の拡大でこれについては変化を見るかも知れないが、いずれにしても神大規模の高等教育研究機関においては、情報収集、発信手段は安価に利用出来なければ意味がない。

送信後、返事がくるまでにせいぜい時差分ぐらいしか時間がかからないのも長所である。実際には、送った時点でホストコンピュータに入力されるので、返事待ちの時間は、読み手側がどの程度頻繁にメールボックスを覗くかということにつきる。つまり頻繁に研究棟などにあるメールボックスをチェックする人には便利なシステムである。誰かが情報を送ったことはコンピュータのスイッチを入れない限り分からず、この点が郵便と違う。自分で情報を取りにいくということは必要である。

情報を集めるという姿勢が変わるということも特徴であろう。従弟制度的な師匠弟子というような縦のつながりは多少なりとも変化する。つまり横並びになり、逆転する可能性もある。

それなりの倫理感が要求される。モラルについては新しいメディアが開発される度に叫ばれるが、このINTERNETにおいてもいわゆる情報の垂れ流し、盗用、違法管理などの点で良識は要求される。多くの場合現在の法制度には現実的取締は期待できないので、自己管理規制能力が基盤となる。

最後に、通信はほとんど英語でやりとりがなされるというのが現実である。日本語でもできるが、この分野、この目的では日本語は不自由である。但し、INTERNETを利用した外国語教育ということは、以前より私が提唱している電話利用の語学教育を発展させたものとして現実的には考えられる。今後語学教育のみならず、大学経営面でのプロジェクトとして真剣に取り組む価値、必要性があろう。

以上の特徴は若葉マークの一利用者が一年ほど利用してみた結果である。興味のある方は楽しくもあるので、是非利用してみるとよいであろう。余談ではあるが、日常私は、私信については縦書きの自筆で出す。自分なりに使い分けるようにしている。